

佐竹 圓修 師 小松教区第2組 光玄寺 (御影道中御下向教導)

「御影道中に憧れて」

桜の花も咲き食卓に白いこなご (こうなご) が並ぶようになると南加賀にも春がやって来ます。出初めの頃は食べ易く美味しく頂くのですが、十日程もすると徐々に大きく食べにくくなります。すると吉崎の隣在所瀬越で育った母が「こなごが大きくなるとギョーキのお参りになるがや」と吉崎参りの賑やかさを今でも懐かしそうに喋り出します。

「ギョーキ」が蓮如上人の「御忌」だと知ったのは、大学も卒業し、自坊で同時期に行われる永代経、蓮如忌のお勤めをするようになってからでした。

自坊の総代をしていた柴田さんは吉崎の同行でもあり、ある時「今度率領になって京都から吉崎まで蓮如さんのお供せんならん」と嬉しそうに報告に来られた。その時初めて一週間かけての御影道中があることを知りました。父が暫く吉崎の副輪番を勤めたこともあり、自坊のご門徒が供奉人として参加したりして道中の模様を聞くにつけ、私も一度は蓮如様の供奉をしたいと思うようになりました。

この度願ってもない御縁を頂き、蓮如上人の御影に従うこととなりました。一週間余り

お念仏と共にひたすら歩いてみたいと思います。供奉人の方々のお荷物にならぬよう努めますので宜しくお願い致します。

石川 正穂 師 富山教区第11組 玉永寺

「親鸞聖人の御生涯 蓮如上人の御文」

蓮如上人のお仕事は、親鸞聖人の本当におっしゃりたかった教えを明らかにされることでした。それは新しい荘厳(飾りつけ)や声明(おつとめ)と共に、「御文」となって現代の私たちにまで伝わっています。

実は私は、これまでなかなか御文が分かりませんでした。しかし今になってやっと少しずつ、自分に響くようになってきました。

今回、初めて御忌でお話をさせて頂くご縁をいただき、私は蓮如上人が伝えてくださったお念仏の教えを、改めて吉崎の御門徒の皆様と共にいただき直したいと思っています。

前半は親鸞聖人の生涯をたずねます。お念仏の道を尋ね続けられた苦難の御

生涯そのものが、なにより浄土真宗の教えを明らかにしていると思うからです。

後半は蓮如上人がご自分の言葉でお念仏の教えを表現された御文を、読み解いていきたいと思っています。 合掌

能邨 勇樹 師 小松教区第2組 勝光寺

「蓮如上人に学ぶ」

蓮如上人は「弥陀たのめ」とよくいわれますが、ただ理屈として仰っているのではなくて、具体的に提示されたのではないのでしょうか。言い換えれば「弥陀のたのみ方」を私たちに示してくださったと思われます。まず、頼むべき対象を明らかにされたということです。逸話に風呂の薪にされて、弥陀一仏を徹底されたということ、そして南無阿弥陀仏の六時の名号を下付し、各在所にご本尊として安置させたということでしょう。次にその対象を讃嘆する方法を明らかにされたということです。日々の生活を弥陀中心に生活する。勤行を勧めるとともに、講や寺本山にお参りするようになされた。そして、講組織を作り上げ、弥陀をたのむ意義（信）を明らかにするために、談合を勧められたということです。以上、蓮如上人の具体的なご教化についてともに考えていきたいと思っています。

松原 等 師 金沢教区第8組 本泉寺

「蓮如上人の教化を偲んで」

吉崎は蓮如上人が坊舎を建立して4年間逗留し、北国一帯を念仏の里へ変えてゆく拠点となった所です。この地で上人は本願寺の勤行の改革を行い、それ以向、私達は『正信偈』、そして念仏を挿んで『和讃』を勤めるようになりました。また上人は吉崎から多くの『御文』を発給しました。お勤めをして『御文』を拝読する度に、上人を身近に感じることができます。

私の育った金沢市の二俣も上人とのゆかりが深く、北国教化の礎となった地です。3歳年上の叔父である如乗が二俣に住むようになり、その叔父を訪ねて

上人が下向したのが、北国教化の始まりと言ってもいいでしょう。ですから上人の北国教化は二侯から始まり、吉崎で花開いたように私には感じられます。そのような上人との御縁を紹介しながら、上人のお言葉を訪ねようと思っております。

玉樹 崇 師 長浜教区第20組 西照寺

「人間は不完全だからこそ、つながりを求めて生きる」

私が大谷大学4年生の時、本山で蓮如上人五百回御遠忌が勤められた。その1・2年前から、急に大学やお寺で蓮如という人名が多く耳に届くようになった。

今に伝わる御文や勤行形式を制定されたのは親鸞聖人だと思っていた無学な私にとって、蓮如上人との出あいはその辺から始まったと言える。

そんな蓮如ブームに乗っかるかのように(乗かった)、私の卒論は蓮如上人となり、学ぶ機会をいただいた。そして、大学のゼミの卒業旅行は、吉崎と芦原温泉だった。

時を経て今春、かれこれ17年振りに吉崎を訪れた。大学時代に訪れた時より吉崎の地が味わい深かった。私なりに人生を重ね、蓮如上人という存在と過ごした年月の賜物かもしれない。

と感傷に浸っている時に、伝統ある御忌で話しをせよとのご催促を賜ってしまった。また蓮如上人との御縁を感じずにはおれない。

上記の講題は、歳月を重ねた私の生活の中でいただいた言葉であるが、皆さんとともに、親鸞聖人や蓮如上人をはじめ、今を生きる人々の言葉に尋ねていきたいと思う。

亀淵 卓 師 能登教区第11組 法広寺

「十人は十人ながら、百人は百人ながら」

私が所属し、お預かりしている能登教区法広寺は、その草創を鎌倉時代と伝えています。もともと真言宗であったものが蓮如上人の北陸進出を経て、吉崎を退去された後五十年ほどで真宗に改宗し、江戸初期に現在地に寺基移転しました。能登をはじめ、北陸の真宗寺院ではこのような例、つまり蓮如上人以降

の転宗の例は枚挙にいとまがありません。

考えてみれば、まことに不思議な話です。私どもの地域には石動山という、標高六百メートルほどの山があって、その昔は一帯を支配する真言宗の寺院として繁栄していました。今でも私の地域の真宗寺院では、石動山に由来するであろう行事「こんごう会」を夏場に行っています。それほどの浸透の中に割って入って、白を黒にひっくり返すオセロゲームのように地域一帯が真宗となった、その原動力がテーマの言葉ではないでしょうか。

熊谷 二郎 師 福井教区第1組 妙樂寺

「お念仏さんが来たよ」

二歳の女の子を残して亡くなられたお母さんがいらっしゃいました。そのお宅へ毎月お参りしていた時のことです。女の子が四歳になった頃、いつものように私が玄関に入ると、その女の子が「パパ、お念仏さんが来たよ」と言ったのです。小さい子どもは「まんまんちゃんが来たよ」とか、「お坊さんが来たよ」というのが普通なのですが、私のことを「お念仏さん」と呼んでくれました。お参りを終え嬉しい心での帰り道、この言葉は単に私のことを呼んだのではなく、阿弥陀様のお心がお念仏となってすべての人を呼んでくださっていると、四歳の女の子が教えてくれたように思いました。蓮如さまも、「南無阿弥陀仏の六字のすがたは、すなわちわれら一切衆生を平等にたすかりつるすがたなりとしらるるなり」と御文の中でおっしゃっておられます。お念仏申すとは、仏の呼び声に目覚め、仏の願いに生きる身を賜るということです。

山本 龍昇 師 大聖寺教区第1組 上宮寺

「聴くに始まり聞くに尽きる生涯」

親鸞聖人の教えは「ただ念仏すべし」という一言に尽きると言っても過言ではありません。それは真宗門徒を名告らんとする私たちに突きつけられた生涯の課題ともいえます。

念仏を称える身になるには、まず私たちが先人の念仏の声を聴くということが大前提です。聴いたことのない言葉はこの口から出ようがありません。念仏を聴いた者がその音に凝縮された願いやはたらきを受け止め、自らも称える念仏者になるのです。吉崎別院に、「亡き人はいのちとひきかえに念仏を遺してくれた」という法語が掲げてあります。いのちとひきかえというのは文字通りの意味と生涯を通してという意味でもあろうかと思えます。

胎児は妊娠六カ月で聴覚はほぼ完成していると云います。だから、産声をあげて生まれてくるのです。また、聴覚は一番最後まで残る感覚だそうです。

だとすれば、人間の一生は「聴く」ことから始まり「聴く」ことで終わることになります。

相馬 豊 師 金沢教区第4上組 道因寺（御影道中御上洛教導）

「生きることは歩くこと」。生きるということは頭で考えることではなく、歩くということは身体全体で感じることなのでしょう。足を使って歩き、街のいろいろな人の生活の音を聞き、においを嗅ぎ、全身で感じる。

「何故、歩くのか」と、自分に問いかけてきます。

「歩」という文字は「止まる」「少し」でできています。少し歩いては止まるのくり返しです。止まって、自分が歩いて来た道程を振り返り、何を見落とし、忘れて来たかを確認、再び歩みだすことでしょう。

日常生活で、難しくて忘れていた「私とは何か」「人間とは何か」を歩くことを通して自問自答し続けていくことでしょう。

無数の人が、「実語」に触れて、現に生き続けている事実の中で、「人として」生きる方向と態度を確かめた「仏事」です。

この「仏事」に一緒に歩きましょう。